

朝夷巡嶼記

第二編

卷二

茶

庫書部	105
109	30
6	65
40	40
數冊	

13
3093
7

茶

茶

茶



人々を

人小見きて

命を

序

奇人目録
借年屋

九月三日
七月三日

朝夷巡嶋記全傳第二編卷之二

東都 曲亭主人編輯

初輯第十三

過去來乃會話
巖堰水の煩襟

吉見冠者義邦ハ井平ガ人トアリ。奴僕五六似ける。見まぶ。ふ。んと。う。ろ

ある。仕。伎。る。り。と。豫。く。入。る。の。朝。宿。所。は。俱。く。還。り。也。事。も。な。く

勤。王。慰。め。或。ハ。物。小。托。辭。を。儲。竊。め。弑。る。の。う。ろ。よ。ろ。づ。み。の。と。真。成。る。こ

奸。佞。さ。る。の。絶。く。わ。り。ま。う。と。文。武。の。才。長。く。思。慮。あ。く。し。て。智。計。あ。り。

か。こ。ハ。喬。高。義。秀。を。射。つ。る。渠。が。僻。事。る。ま。ご。主。命。然。止。ま。ら。ぬ。の。と。當

坐。の。難。美。を。固。人。と。く。罪。成。其。の。身。は。負。る。な。う。ん。彼。時。夏。の。残。心。の。か

僕。を。憐。む。め。の。う。ろ。松。ど。も。そ。を。苟。中。織。る。と。ほ。况。て。ま。く。情。成。被。る。

吉田屋

吉田屋

吉田屋

吉田屋

吉田屋

吉田屋

こま使の緊要のとれ。役めつづるめんと。慥に怒らるるまは。是
より捨つるえつひあり。井平も又義邦の士を愛し賢友敬み誠心感
佩し。つくと心あかす。あつ下の刀袷に蒲殿（蒲殿）のちん子（ちん子）ととぞ人へふ
現田舎の生育多し。蕙蘭あつづ。餘馨あま加之才智學問あん父
君の遠より。後憑しを少年なり。この君は仕へる。附驥の功をも
成べし。とぞ人の心傾け。拳動まじらふ。さしどもの時夏ふ
疑まじ。心あかす。心の底を人へ入る。せむし。さしどもの時夏ふ
人目むらまをまのびく。あつ下の告め。かくをや。八九十日を磨る
経は有一日義邦の朝夷が安否。返へと。三二廣光は小廝を隸く
ト塔庵へ遣せ。小日の團る。あつ下の。何とぞ。心あかす。井平の
由を告。迎の人を遣。また。捨つ。かく。相彈。井平の

頭を低く沈吟し。朝夷の世の豪傑才智高れ。勇まあり。あつ下の。さしどもの時夏ふ
仇はあつ下の。さしどもの時夏ふ。その道。あつ下の。欺くと。君子と
いふ。討つ。某。仔細あつ下の。三二が信を。あつ下の。捨つ。せむし
る。後悔のや。いと。真成。答。義邦。あつ下の。點頭。さしどもの時夏ふ
如右。あつ下の。問。あつ下の。不樂。あつ下の。みづ。あつ下の。さしどもの時夏ふ
づ。和風。あつ下の。龍。あつ下の。あつ下の。さしどもの時夏ふ
あつ下の。日。暮。夏の夜行。あつ下の。さしどもの時夏ふ
あつ下の。猛。割籠。偏。あつ下の。物。あつ下の。調。あつ下の。一個の奴
隸。あつ下の。井平。あつ下の。あつ下の。刻。あつ下の。王。後宿。あつ下の。さしどもの時夏ふ
直。あつ下の。一里。あつ下の。途。あつ下の。廣光。あつ下の。小廝。あつ下の。さしどもの時夏ふ
よ。あつ下の。義邦。あつ下の。廣光。あつ下の。暎。あつ下の。朝夷。あつ下の。さしどもの時夏ふ

恙るや。你が今朝宿所出り。も返命承け。思ひつれ。又
 彼庵へ。とく赴く。いふそや。と問う。色と。廣光ハ笑る。進み近つて
 小腰を折め。朝夷ハ別條は疾退さんと。思ひる。齋の偏提。搦
 物。も長う。是。變せ。今。月。隣。て。い。と。お。の。顔。指。呵。と
 うら笑ひ。側。立。井平。小。目。礼。を。け。井平ハ。義邦。の。容。を。愛。し。と
 打。お。う。忙。て。宿。所。出。り。緯。の。越。友。告。程。小。義邦。と。思。入。り。て
 朝夷。の。安。不。口。を。志。ま。ど。も。あ。ま。ぐ。来。る。や。ハ。日。人。廣光。ハ。罷。ま。く
 留守。せ。よ。こ。こ。人。は。對。面。ま。く。甲。夜。の。ほ。ぶ。還。さん。ど。ま。ろ。為。よ。と
 い。い。あ。い。ど。頻。進。む。主。の。袂。廣光。急。に。掖。し。め。彼。如。ハ。山。麓。の。孤。館。る。り。
 今。も。赴。た。り。願。う。も。い。ど。も。止。ま。思。召。べ。こ。の。小。廝。を。俱。させ。人
 井平。の。が。副。も。あ。ま。い。何。で。ぶ。う。い。べ。た。ら。是。他。の。重。鐵。も。を。禮。ま。

身。の。征。前。と。御。た。に。斷。離。と。も。の。身。甲。を。重。心。ま。の。あ。じ。と
 り。長。邦。使。吏。も。ある。廣光。が。例。の。癸。鉄。媪。子。ハ。人。の。家。臣。の。是。た。こ。が
 杖。持。ま。る。こ。こ。四。个。月。警。ハ。魚。と。水。の。如。し。ま。の。人。あ。が。許。多。の。後。者。ゆ。の
 へ。事。足。る。人。こ。こ。如。此。也。ど。も。汝。が。こ。こ。休。る。あ。そ。の。男。子。と。も。お。て
 べ。女。と。も。お。あ。ら。ん。と。宿。所。へ。退。り。休。足。せ。よ。大。儀。と。と。い。ひ
 り。彼。小。廝。も。勞。ひ。進。む。主人。を。と。免。吏。も。廣光。ハ。立。ま。り。井平。ハ
 主。の。う。へ。叮。嚀。小。懇。使。え。こ。の。所。より。只。い。り。吉。見。を。投。か。け。り。
 ころ。後。小。義邦。ハ。日。も。と。や。没。入。と。さ。る。比。小。塔。庵。へ。お。く。ん。且。が。度。門。は。物
 あり。と。い。つ。と。あ。ら。ん。何。し。食。立。よ。ま。て。つ。と。と。思。入。る。大。井。ハ
 白。ゆ。の。壁。と。大。蛇。の。蟠。ま。る。れ。こ。の。い。つ。と。驚。ろ。が。井平。共。侶。を
 立。朝夷。の。恙。る。や。吉。見。義邦。結。ま。り。井平。も。系。と。め。た。ら。や。い。ふ。

の大蛇は蟠りて尚かの如し引伸ぶつるも入朝夷ぬ天神汝鳥獲項羽ハ
 一人が所為とく何れうよく二直矢刺とめんむそとくしと辨齊一稱
 賀下透りて裏面入るる点燭しうするまけり當下三人商量しとわら
 緯の越矢時夏小告んとく美邦ハ状書写め一個の後僕を召のせて云と
 まらるるを井平がらふをうらうら口まきとるると敬言と馳く刀野が宿野ハ
 遣一又一個の小麝の消息と廣光小告のしとく吉見へ文らんかくと又齋
 酒内と井平まきと披せて美秀又祝の盃をゆめふまは美秀あま
 然びく君者の思後ハ寔ハ高るといふ人許小告とといへ元相疑るる
 終るる加之媪子生緑坂まき一言の信めとく大く人となるる察
 さらかど又何なる蔽さ入是是入人といひうけて時夏が下給小贈一密書を
 とり出せし西人齊一とく瓜んく更ハ驚くともんとか中井平ハ數面嘆息し

恥しや朝夷ぬ某ハ刀野が為小辯等恩顧のれるるねどもその家ハはる
 う瓜棘と容らまきとればとくその悪友あふえんと不義にと思ひふま
 云云とけふあま君者の君は尚後とくを告まほしと緯發覺てはるる小
 匿む小甲斐もゆりまきと密書を小下給ハ朝夷ぬの寝首を刎入と度面より
 潜びよる折ゆらうる大蛇の為ハ命ハ限せるめるは是則天乃志報
 善人を害ふ刀ハ竟小その刃を劈くるまきやまらまきと下給が
 毒蛇は向んるあまうもゆりまきとらば美秀うち点改道也如右ま
 くと給が調度瓜撈まきこの密書を小獲つるえ彼時夏が毒悪るる大
 蛇もゆらうまきといふまきとく小避人ハ殿ハ素より智計あり教也と
 清向ハ井平且く沈吟し彼人郷土とくといふ北條主時小所縁あり不當
 國の守足利殿兼由等困るまきと欺待さる虎威を借く竊は謀るるや

冠者の君との御く小柄るるん致いといひるるる。朝夷の勇あり
 とも。あの地はあつた危ううん賢慮いふと密路ハ其秀ゆり一強ゆ及
 つと某も如右ゆみの恨るる文をまゝよまをるふ由は恩を受てい
 報せむ中途ゆく別とと承といひり頻々嘆息を養邦も慨然と共侶
 嘆息。今この三人志あはれども別頭の友垣を締束む朝夷ゆを蔽
 屋小笛と稱せり。旅より旅小遣んと愧るふ由後おまり何と幸ゆ
 兼らまむ其紹めまゝ方あや加賀國石川郡小松の郷るる社官が
 子小佐味空内高利といふ仕役の長老小仕りある。某も亦交篤なり
 彼人頗學問ある。その性廉直なり賢を敬ふ長老は化世後小柴崔置
 ありといふも雁書年々小往返して某と疎く和君彼知へ赴たゆり。飲て留
 むじり某が知音のうえ赴たゆり遠くも再會の時るるもやこの幾は

任せまゝといふと懇切よまめれ。其秀ゆり感佩し某素より相
 まけは今幸小死友をゆる。但外賢を憐れむ亡命のはを告む
 めと訣を分る竹をりて死友といふ。この席小外人あり。あつたふ
 ちうさ某が母るるの木曾義仲の愛姫則中二權頭兼遠が女兒巴あり
 父ハ則謙會の功臣たる廷尉和田義盛る。某質弱な病より眼女裸
 父は棄て置臙母を要む。乳母が懐ふ抱まゝ安房の大瀧小落る。り
 めのとふ。乳母夫婦は養まて田畝の中小入とるれども満祿寺より文を
 ぬ廣常が舊臣に健田秀也は武を學ぶ。青雲の志る死ゆゆあざれと
 いろせへ養ふ浅江の典六ハ眼代能堀圖内がる小枉死。養母某も頭
 前かく巴の尼と稱し。廻國行脚の首途せり。某遂恨ちるる。その夜能堀
 第(階)び入る。圖内親子尼并佛も父の誓する。六人を殞。水行



朝夷義秀



冠者義邦

堀子井平

俱利伽羅の六刀暗み神龍を
 蝙蝠や 玄同
 はむえ
 のこと
 夕月
 夜

俱利伽羅の六刀暗み神龍を

よつて武蔵小湊の下総と赴き、圖らざる健田老人の環會彼れふとつと僅か一手
 師ハ病著よつて果てく藥餌も終て功驗は既ふその終に臨み紹成の書を
 送り、忽地ハ呼吸絶へ其哀惜の至不堪と真中の野寺ハ柩を送り送命ハ
 仕てこの地又葬りて是る父義盛が鎌倉殿より恩賜の一刀母の巴が像見え
 原ハ源家の先祖ふとせし多田満中の遺物とを傳へたる劍ふのいと愛しく
 不動三摩耶の散俱利迦羅龍を鑄る、これハ俱利迦羅丸と名つけし養
 父が仇の件の大蛇もこの刀の如く殺彈せり、これハ父といひけく刀を合す
 引抜ハ夏る月寒き葦城の霜は照そ月る、銅花秋水光現、隱
 とくく刀尖上ると白龍閃光升るが如し、義邦も并平も音ハ傳へ俱利迦羅
 の大刀ハとと飲と燭を秉り、共ハ感嘆をりける、且く義秀ハ刀ハ納て
 備ふおれ、來歴ハ既ハ盡せり、疑はる吉見ぬ、當國校生の郷士ある

へつて媪子生も亦あつて聰明伶俐下司ハ似せ願ふ群は、先考
 先妣ハつとふと、同ハ義邦貌を改めこのるを、告へるは生憎折派
 のむの不肖を顧みざる、面も面も、父ハ則幕府頼の連枝三
 河前司範頼ハ母ハ則安達氏盛長の女見ん、父終者ハ彈き、彼ハ白寺
 あり、自殺の折潰の宿る屋方ハ時夏が父刀野照時追捕の大將と、馳
 向ハ恩免あり、母を竊ハ害せ、事獲見、照時ハ自殺、時夏ハ執
 權政の搜捕よる、省らざる、下野ハ流さると、後ハ定くハ傳へ、この
 時某僅ハ九歳廣光が兄江流、廣通が智計ハあつ、廣光夫婦吾等ハ
 俱しく、謙倉ハ脱去、均長老ハ、外伯父る、卒、當國ハ落、
 彼長老の愛顧を蒙り、廣光夫婦が忠義ハよ、人、
 照時自滅の後、父野心る、幕府ハ、
 其

あまのこゝろの追罰のゆはゆるく召えさるるもあじと亦毛後よゆえり幕

府の通去せりく左金吾類の代とるじく帰来の路とるり

朝夷ぬ嚴父ハ則鎌倉殿創業の功臣なり又母所前ハ相將軍義仲朝臣の

側室なる古今獨希の勇婦と管けり今社也後ハ嚴父のゆを蒙りて

鎌倉へ召えさる國郡亦も領しゆりめたり免る面を對せり日よと度入るも

あえりきとせりいり違りほどあみも素性ハ後張りくハ二稱賀大

後父昆弟ゆとりやの和君ハ等しめめるるんや岷山の片玉ハ泥中ハ塗れて

その光王破碇ハ異人君ハ性の温順るる貴公子の風ありとせりゆひり

うけく上坐ハ結とる長邦ハはる辞ひくある竹る瓜ゆるくやん其ハ浮

浪のめえ雅ハ範頼の子とせりえ義ハ仗とる貴職を同むその長少とて

とせり和殿の青春幾許そやと向きく後秀頭ハ十八歳ハゆとつる義邦

ちも微笑ハゆと珠ハ深良王其ハ一歳の兄ハ心る推辞ゆひり

舊の席ハ推居温子ハゆととええと井平ハ小膝取とて西君ハゆと名

家の精流將帥の器とるゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと

よく股肱腹心とゆとゆと樋口次郎兼光ハ子ハ乳名金刺とゆとゆとゆと

暦元年正月下旬木曾殿討たゆと比親とゆと兼光ハ將命ハ義とてゆと

十郎藏人行家ハ討んとて五百餘騎を引率し正月のちゆと華浴をゆと

内國ハ馳向ハ軍ハ勝とてゆと歸洛の比ハ木曾殿の討死のゆとゆとゆと

兵ハみる落亡と残るハ僅ハ二十騎必死とゆとゆと造道四塚より東寺の

ぼとゆと時ハ源九郎判官義経の郎黨ハ原十郎高綱と名告ゆと

百餘騎とて蒐塞王散ハ攻戦ハゆと兼光此ハ中駿ハゆと二十騎を直隣ハ

備。刀尖上より人出づ。おぐ。縦横を身小。破立難伏せ。敵の大將原高綱を馬より
 撞と破く。落し。頻に進入し。戦ふ。福は兼光小。由縁ある。児玉黨が。和論より。中仕
 一。洛小上。大將判官。殿。細を。一大刀。怒を。存さん。と計し。と。と。其。覺て。忽
 地小。終せん。心。その。と。其。僅小。四歳。乳母が。背小。負。ま。近江の。賀小。落。さ。や。り。
 稍六才。小。あ。秋の。比。乳母。持病の。積聚。重。ま。竟小。ひ。く。る。ま。い。ふ。そ。が。老
 母小。養。ま。十。と。い。ふ。年。の。終。り。小。あ。の。の。媪。さ。人。力。ま。り。て。入。上。る。の。岸。も。る。え。舟
 の。揖。失。へ。る。あ。ち。し。と。文。小。洛。上。上。る。聊。の。所。縁。あ。何。が。寺。小。奉。公。し。其。知
 め。く。読。書。の。習。を。僅。は。學。ぶ。る。為。多。り。吾。侪。素。も。と。孤。み。く。乳。母。が。親。の。老
 小。小。養。ま。ま。と。ま。ま。入。み。る。ゆ。び。く。媪。子。と。い。ふ。父。が。最。期。由。木。曾。殿。の。討
 死。の。為。件。を。媪。が。告。り。あり。か。て。年。十。四。の。丁。ろ。の。目。を。病。ぶ。ひ。て。瘡。る
 へ。と。覺。え。ぬ。清。水。寺。の。親。世。音。を。祈。り。ま。ま。は。と。一。百。日。普。門。品。と。読。誦。ま。は

正。一。千。度。小。及。び。し。と。眼。疾。平。愈。ま。り。け。し。名。小。井。平。と。更。ぬ。え。廻。甚。早。隆
 の。利益。も。く。難。病。平。愈。の。後。を。取。ま。り。ま。る。ふ。北。條。時。政。ぬ。京。都。の。守。護。に
 たり。某。を。齎。して。住。持。小。と。く。扈。後。と。後。鎌。倉。小。ぬ。く。か。へ。り。と。も。ほ。り。近。く
 使。ま。り。彼。ぬ。の。公。さ。る。憑。一。く。ま。ど。ひ。へ。事。小。觸。ま。て。仕。を。辞。し。身。退。人。と。欲
 ま。し。入。却。小。許。さ。ま。風。外。様。へ。遠。ざ。け。ま。ま。う。る。小。眼。あ。る。才。と。ま。り。ま。く。文。學
 武。藝。の。師。小。就。く。形。の。ど。く。學。ぶ。ゆ。え。か。る。ま。け。ま。も。お。そ。ろ。し。き。執。権。父。子。時。政。小
 い。ら。ま。で。ろ。使。え。た。と。憤。激。し。と。去。り。歳。の。春。の。比。ま。ぐ。身。の。眼。を。こ。ひ。し。小。執。権。ハ
 其。の。願。書。を。擲。く。大。小。怒。り。井。平。が。主。小。と。ま。て。入。過。ま。る。る。小。時。政。小。不。足。あ。る。故
 奇。怪。へ。身。の。眼。へ。と。ま。ま。ま。ま。ま。ま。又。鎌。倉。小。の。厩。へ。遣。り。し。刀。野。太。郎。小
 使。せ。る。の。途。よ。と。逐。電。せ。し。木。を。伐。草。を。刈。竭。し。て。も。索。出。し。と。頭。を。刎。人。の。首
 を。存。せ。よ。と。い。の。嚴。く。提。せ。せ。し。人。兩。三。人。添。ま。ま。く。刀。野。小。預。り。は。し。より。門。客

ままとも勢ひふ當りかゝつていつともく奴僕小等しく使まてり。時政好のこころ
 ぬものごと時夏の人とうり西君をせむか如し。さるは某不忠存甘とあるが
 ちか楓練加えし彼人の為のこころをいふこと。練めく聴とまふ身退くといふ
 本文を守ると多くあり。かほに福小のりあり。討者不知れ有り。假初るか
 西三月其如仕るつらむ。朝夷ぬ小疑まを今宵の團坐小ゆると東葉
 ちか朝小立とも面目こまふゆきとめは望足まといと練精細は述しるは
 秀つてうちゆく。原來この杜俊は実父の功臣なる兼光が子であまけるよ
 うに義仲の遺腹子と告むやと必ひや師の戒はかゝ時ごと必ひえく口只
 管小唱歎まると音を絶ど義邦ハ殊更小膝の進むは是に共侶
 歎嘆。猛將小後ほとつとも忠義小付と討とたれその才死然をゆるる
 のち後真とつとつとる。譬ハ彼兼光ハ武畧勇悍を双の武士とつとる

針行まむ遂に殊戮せむとこれどもその子小又この奇才あり後真とつとる
 疑ふべうと義邦孤獨の郷士ぬく士を養ふは禄足まを賢者を扶持する徳
 うく。只管捨つとたぬひあり今も五口倚小仕へるは食天うちて養ふ
 媪子があつたふと。同じく井平頭をうち持との幾ハのつらむ時
 夏ハ能と相こ已は勝るのの瓜璋む。某討者小仕へるは彼人こまは飲んや執
 持小告領主小亦た復さんと謀るるは是禍を招くま似たり。つらむへの入るこ
 あり士ハ已をまるとのぬ死し女ハ已を執るのぬ小貌くは某只管崇とあそ
 び。後つとあつたふと。かゝるは為むとの故成りく。君小禍ありせと。深く
 念ひてまうまの朝夷ぬ別を告ぐ他郷へ赴るるは時夏必死結ん。只あまこよりま
 えんと疑ひはそのを惜ま推辞あり。時夏必死結ん。只あまこよりま
 告ぐ某をえ。其彼処はかつとつと心ハ君がやらまふあると。あん大事

あつらん死をりく恩義の報せんゆ何てん上つてたのまど曉るのふきや時
 夏がくく怒り某と遠離る小尉者預け寄はるるこのの公告を
 謀をさるる人ぬえよきて某の人のぬふらうかぬさるるの書つけくまのひ
 志のひ小時夏告りた如此せざる彼人の疑はんとおんがえさうく小時
 やまらると真成小練一ふ某邦頻ふ舌を掉く時夏何等の入るさかきそふ
 奸智の長る教らる縛の趣有臆小死めたる秘まへくと落ひる回答小長
 秀さるるもと共侶ふち点改尉者へ練を容るると江河の故を容るが如し時
 夏さふふあるとあふ某假小井平が過失を勸解くかくらん彼人のいぞ来ぬ
 隙小紹の書状さびてんやとのそがせら某邦へ視官を探りしり墨墨をり流と
 さるくと支書さる程ふ江三二廣光ハ小厮二人小松とりさせと背門口より進
 入る井平ハ出迎くやが彼毒蛇のる公告その他ののの密語なりそ程小長

邦への書状を字とらるる長秀ふち對ひ翌六餞別して送つとあふ
 へん今よとくやうと入北國赴死すひくたうく小使ゆくと来春
 雁の飯る比ふが里ふまわく遊び人そとまわくゆ幾處も信を他のまわり
 佐味生ももとまわりのよ友言焼る人と契らる彼一通處處とふる人長秀ま
 辱しと右小受と燈燭よとせら宛名をいやく賦く懐は挟めふ幾
 邦ハ廣光を口よせと對面を當下廣光ハ義秀が武勇を稱譽てこの
 差ふるを叙記びよて某邦ふやうとやう刀野との入遣さるその使もや
 還りぬ彼人の宿もさるまよ来会せんとこの公告まうとへく又の安否も
 志もゆさ小使の男を休せと別ふ二人の小厮をおく某義王のい人
 義邦左右をええり志る媪子の廣光共侶を尋言見へかり夏時夏
 猪末の便なくととせがせら井平ゆくとまこと出定は官への如し

件の毒蛇を焼竭して結を其果るとかく長邦の樵夫莊客們の共小宿野へ
 遷りて殊終ると今いへば長秀の追著るにと魚燥の六日の首蒲を簪ふ旅の
 十日の菊を離し採るまのちとんいへふ山小堰より苔清水濁る人の後小
 跟くと結庵を退歩の途より中や引別を廣光と目をあけて主後齊一嘆
 息一鬱とく吉見る宿野へ之と宿りて真夜中ちくたりけり

純柳乃廿廿井
 初輯第十四
 巖神の地藏會

朝夷三郎義秀ハト結庵を立出く途まがも領主の目代本おる且ハ
 射者ハ如る小程あはしくこの地の名残る何憚のあふを吉見ふいたて
 彼処小俣人と輔よ尋思りし處に長邦の宿野小ぢき渚中ハ井平出迎く
 大元は歎び立よとせふふの心を定とつひ多か遅るはとく遍る小斯を門

あつとる物と目井平の眉根をよせ介少射者ハ殺あつとる人雲雲時
 りつとも甘丸多と真成小曾待く准由の酒有を按排ハ五三順ハ及ぶと
 二三廣光が妻淺良井ハ衣裳更て長秀小對面一着を添酌を執ると鹿
 嶋立を祝せりと長秀ハ疑待の浅くさる友終ひあえと盃をさる且ハ淺
 良井ハことを受む数もあらぬ婦女子がうてる勇士のちハ盃を穢た願ふも
 しが子小あつとる君が武勇小類ハ世王の爲親の爲ふ名を由揚家友を與む
 眞加あつとるひ孫といひく後方を見えとや小三二よとく衆してちハ盃を
 多の且と阿唯と恥ハ廣光が一子小三ハ憶ハる氣色るく遠く
 妻里まゝ母の側小あつとる浅良井ハが子の項小骨くけり額をせす

浅良井井
平義秀小
銀別す



井平も又預りて。こゝに全く時夏が所なるべし。と思へども、浅良井共信辭を竭
 しく見せんと。先か笑秀竟小住。是れと彼れの間近くもあき井。あき井は
 歸宅を湊んと。止宿する程。あき井は投て。あき井は。あき井は。あき井は。
 まつと。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。
 果つ女。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。
 かまて。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。
 まつと。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。
 猛小刺立。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。
 さうよせ。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。
 多ふ。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。
 の。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。あき井は。

背ふよるる恥え路費へ故郷へ出るとは母のまじりがるは餘りありこれ
 こそ又あ人日まど預まぬととらひあを再び立んとまゝに後良井
 眺み引とめ思ふ受させむので田守する甲斐も待たぬじあつたごふ
 どののくははのく小ぢりんや切くこまを納めると苦小まめへ義秀遂は
 おかき新衣は脱え舊する夜へ殊さうふいと惜げ小置はけり
 扇の用立ては小載せ江の内室へ憑むとあまここの舊里へあじ時母が織
 の夏衣へ肩膝へ蔽せてもかゝるは綾羅小あまよるめめるのじあを
 ろろろは物多るは且く思ふ質とくく田おくとあふえ甚籠塞るるた
 且く領主とまといふ後良井への孝心と廉直なるふ感佩し聊も亦
 こそ又推辞を定ふ趣あろるるにんご垢つた汚さう代ゆふけを
 洗濯くろく秘おれたるまといふは義秀大なる教び贖の根懐ありと

後良井小別を告を外面小あふ井平へあつた代と里盡知まで送るふ
 ろん義秀まぐく辞まじりども。あ月列々小る忍む。二三十日あふれが義秀
 こそ又えりく並木の松は尻をすけ。媪子久さ日の暮べたよこの如より還ま
 ぬ時夏小あまゝるる。和敷のふよとあじ。とく。とこそせむ井平へ
 まゆるまど。某いそでう月のくあ小彼人をおそむえ外め取へへ両君乃
 ちんをを思へへ今豪傑小離近く。教を禀る日久く。まを懐む野へ今
 又公の疑念あり。願ふ君の明影よあふ人嚮は告まうせ。某が父兼光へ
 木曾殿の三男臣より。義高。頼朝の女誓え。今する月あはふ。某とま小仕人小木
 曾敷撃まよひ。比伴の君へ武義さ。入間の川の畔あふ。命取隕させさへ
 と後小ゆくの。惜ても詮るる。只主家の滅亡愁小時政ぬ。小仕人小
 この恥あると刀野を去る。義邦ぬ。小仕人とま。ま。又和君も随ひ

かう。さかへ。とく。乃野が家小あつらふ。吉見との。為小謀ふ。福袋竊こ。主と
 う。賣るえ。又時夏が。為小謀く。義邦を。階ま。する。策と。佐と。竟を。討ん。う。ゆ。爪
 ぬ。へ。十。日。も。不。中。この。地を。脱。去。て。天。運。不。仕。せん。歎。許。し。ぬ。の。和。君。小。後。の。走
 ら。んと。ぬ。め。の。こ。こ。の。義。秀。既。死。す。ち。悼。この。其。ま。つ。る。ま。と。義。邦。の。和。敷。と。と
 既。小。佐。を。ぬ。け。り。と。ぬ。け。り。今。辭。せ。ざ。り。て。こ。も。捨。る。不。善。する。ま。や。加
 之。和。敷。も。ま。つ。ら。時。夏。怒。り。こ。こ。を。逐。ひ。義。邦。を。防。め。る。人。を。疑。ひ。彼。と。ぬ。へ。へ
 小。住。る。ふ。わ。を。ぬ。め。の。は。し。り。馬。意。我。の。く。推。た。た。乃。野。の。和。敷。が。主。君。を。ま。つ。む。
 吉。見。也。和。敷。が。主。君。小。あ。つ。ら。ふ。と。ま。つ。ら。ふ。後。へ。ぬ。勢。ひ。敵。に。死。ぬ。主
 づ。を。と。捨。て。た。入。り。志。同。い。た。有。る。果。死。去。ん。と。ま。つ。ら。ふ。ぬ。ま。こ。こ。ま。つ。を
 佐。人。と。ま。つ。ら。ふ。ぬ。ま。の。黙。り。を。ま。つ。ら。ふ。時。を。俟。べ。白。龍。も。時。を。得。ず。て。蚯蚓。と
 穴。を。共。小。ま。つ。ら。ぬ。蟻。蜂。の。為。小。苦。め。る。候。こ。も。亦。天。の。命。人。和。敷。逐。電。さ。る。小

及び。義。邦。の。ぬ。め。る。入。り。脱。去。る。も。可。去。る。禍。を。避。さ。る。入。り。謀。の。よ。う。い。た。ぬ
 ぬ。め。る。義。秀。乃。和。敷。と。舊。縁。あり。然。と。も。今。ハ。告。さ。す。こ。も。亦。時。を。俟。べ。よ。つ。て
 聊。も。蔽。を。と。も。く。愚。意。の。判。断。か。の。如。い。鄙。陋。ふ。い。の。釋。迦。の。ぬ。め。る。入。り。徑。を。編。む
 類。の。ぬ。め。る。入。り。か。へ。り。も。ぬ。め。る。入。り。井。平。あ。つ。ら。ふ。感。伏。し。ぬ。更。ぬ。又。一。様。に。及。び。言。う。け
 ら。ぬ。ぬ。め。る。入。り。ぬ。某。不。肖。と。い。ふ。も。禮。と。教。と。守。ら。ぬ。入。り。も。再。会。の。時。を。俟
 なる。と。い。ひ。つ。嗟。嘆。さ。る。福。小。義。秀。の。働。と。勇。を。起。し。さ。る。が。た。ぬ。め。る。入。り。袂。を。分。り。冠
 者。の。言。は。す。の。福。と。い。ひ。ぬ。ぬ。め。る。入。り。腫。を。旋。し。北。國。を。投。て。去。ぬ。ぬ。め。る。入。り。井。平。も。遠。く
 ぬ。め。る。入。り。後。影。を。目。送。ら。る。遠。く。吉。見。へ。還。り。たり。さ。る。福。小。義。秀。の。ぬ。め。る。入。り。僅。小
 三。里。ぬ。め。る。入。り。の。白。屋。に。宿。を。投。め。次。の。日。夙。又。出。し。ぬ。め。る。入。り。路。費。と。も。受。り。ぬ。め。る
 あ。つ。ら。ふ。素。より。急。が。ぬ。旅。さ。る。小。越。路。ハ。殊。さ。る。名。所。多。う。と。途。の。草。の。ぬ。め。る。入。り。名山
 靈。地。を。拜。ま。す。と。ぬ。め。る。入。り。山。ぬ。め。る。入。り。遊。び。水。ぬ。め。る。入。り。水。飛。龍。に。旅。さ。る

後小日を弥ぎり越の州よりくさちある秋の初風をむくつ。多ひの外日了
 へ。七月の廿日あるまふ信濃越後の界小跨る越中国新川郡佛岳の麓を
 遠り婦肩郡岩神といふ里を過るふそや黄昏ふるまふまふとこの日の九
 四日るまの地藏のつとと思ふく。家と母とどうげる。燈籠を出し。鉦を
 鳴。鼓を鳴。童男童女うち推てさむく。る燈籠を頭。載き。茜深の
 浴衣のちび。を被る。もあ。戎の標。緋。襦袢。木賊。今宵を暗と打拵
 久。長首。一隊。彼首。一隊。ある。能。躍。り。鄙。ま。あ。ま。め。づ。ら。る。
 足。め。よ。と。と。立。ち。あ。ら。る。く。ん。の。と。あ。の。二。日。の。暮。つ。か。く。宿。に。投。る。今。宵。の
 接。ぶ。日。あ。ま。と。と。の。家。も。宿。と。貸。さ。せ。ん。さ。だ。も。あ。ら。る。里。盡。如。ま。て
 未。ふ。た。れ。人。食。猛。ま。ま。り。ら。び。く。後。る。町。小。枝。摺。あ。ら。る。山。の。主。あ。や。あ。ん。
 側。杖。小。あ。ら。る。と。林。あ。ら。る。も。あ。ら。る。く。門。ハ。戸。を。鎖。灯。火。ら。ち。滅。く。

寂。莫。と。お。さ。み。く。如。法。暗。夜。ふ。ら。る。く。長。秀。旅。宿。の。便。糸。失。ひ。る。前。面
 あり。人。家。の。あ。ら。る。と。あ。け。ど。も。青。田。の。と。ま。り。蜘蛛。小。池。る。田。の。畔。の。前。後。定。ら
 る。ま。ま。の。の。程。あ。ら。る。途。志。さ。ま。ら。く。その。夜。初。更。の。比。及。小。嚮。小。過。り。岩
 神。の。里。盡。如。小。遠。ま。未。ふ。ら。る。く。と。果。と。果。と。と。ん。と。右。さ。ら。る。樹
 立。の。間。小。引。入。ら。る。家。あ。ら。る。と。あ。が。く。火。の。光。隠。と。う。て。れ。が。よ。小。張。り。丸
 ま。ち。ら。の。横。巷。路。は。進。入。る。と。二。町。だ。ら。る。と。親。ま。バ。果。と。と。ら。る。く。あ。ら。る。ぬ
 い。と。大。あ。ら。る。家。あ。ら。る。と。け。り。夜。目。の。と。ど。の。里。め。く。富。の。め。の。あ。ら。る。と。ん
 南。面。小。衡。門。あ。ら。る。裡。面。の。あ。ら。る。冬。木。多。う。と。角。門。あ。ら。る。扇。を。推。さ。ふ。あ。ら。る。つ
 う。う。開。け。ら。る。衝。と。入。ら。る。又。ら。る。左。の。方。の。牛。小。屋。あ。ら。る。穀。倉。二。ツ。ツ。四。ツ。ツ
 あ。ら。る。て。前。面。ハ。則。母。屋。ら。る。樓。は。簾。を。け。ら。る。と。燈。燭。の。光。鮮。明。入。道。い。え。ら。る。と。ん
 この。燭。ら。る。と。危。溜。の。う。め。人。數。豊。富。と。声。を。と。ら。る。と。立。ち。あ。ら。る。と。門。小。厨。と。あ。ら。る。と。

の出く細中戸を引用つくと透入く何人ぞと問く義秀ハ慙慙おれ
 くらさるる夜吉の宿を投る小件の男のよき仲りごとあるころな
 の人のその今宵はゆりまじりいと難儀するまじらあまづ主由家隸由駒
 渡りくおご夜食さるるむど泣く口強の商賚の最中るるの夜あんで人さ
 留むるあふおやすまでのほ外は退りて投る人といひあて用けける戸
 してんとまる宿は義秀の急なゆりまじりき折とゆりまじりき求むるむ
 ぬいど鄙語ふいふ膝とも高量数るる後とも某ハ両刀を腰に帯り偽
 り敷くのおあふ縁故を知じゆりまじり真夜夜尉のよすがとあふ入飲り
 るゆりまじり他言のゆりまじり大を脱示りてとゆりまじりゆりまじり
 吉打鳴じゆりまじり血のゆりまじりゆりまじりゆりまじりゆりまじり
 ちゆうせん今宵あふの愛女が燈籠舞踏をいふ出く悪棍を棄れりそ

救ふる術のゆりまじりあふ夫婦が憂苦愁歎さるると思ひあふ宿賃を
 この故んと出ると遠く又戸を用んとゆりまじり掛は義秀を戸小を掛く
 露なるまを動せむこの後るる究る易る某既よ今愛女救ひとりていふ
 あふゆりまじり告ゆるとゆりまじり走るとせりがおぼつらむげゆりまじり
 いるるゆりまじり偽るる人あつて救るゆりまじりゆりまじりゆりまじり
 てもあふ財を盡すてもかろるゆりまじりあふゆりまじりゆりまじり
 投る後る他郷の人か進るとゆりまじりゆりまじりゆりまじりゆりまじり
 ありて遮りまじりゆりまじりゆりまじりゆりまじりゆりまじりゆりまじり
 現両刀の誰由佩せ世界過半ハ武士るまじりゆりまじり賢不肖あふ剛億あふ一撃は
 論せんや娘女子をゆりまじりゆりまじりゆりまじりゆりまじりゆりまじり
 此の外面より戸を引くととるゆりまじりゆりまじりゆりまじりゆりまじり

柱のつらむ足を張く因せせと嗚呼堪え腕が折まる誰由ある彼を
 救へと云ふ救へと叫びてこの同答を待つるの西二人支度し戸を披き
 一件の男をいり叱りて退らせ客人且くあつせり宮ふすかあふ告ぐ
 同答をいり人と他度うく勸解くそがやの奥に走り入る人とて音由
 せと程あつて老僕とあひまき四十あまりのとと出で義秀が名字と同あつが
 見えなさんとおもひまき且つあつて今ひひけり今ひひ女用の式室に燈はく
 菅笠うち布く義秀の尻を掛させ小躰を召く大丸る盥ふ湯を汲入る
 させく足に濯せまぐり初めは似せ叮嚀しかて客房に案内し燭臺
 二臺並建しる昏のどくと明るを義秀に坐せしめあつての出る候ふとふ
 男の童湯盆をむむその磁器とふ鄙ま似けりいと浄る床の間に脚高き
 堆朱の臺に紺青石の置物と佛繪師良秀が不動の懸幅を掲げて活花

あつて香の煙細かゆと立沖る地蔵の不動の本地るまのけのふふと
 女且くくあつての翁對面と年齢ハ五十あまりのに越の麻衣と青葉
 紗の袴を穿たり實主の坐定あつてあつて不意に客人のこが女見と
 救ひとせめひとけりるり笑するらんふは再生の高恩よりの何れ
 ちてうけひの巨細又知じ多との義秀のちち点現みするものゆり
 ちてうけひの翁の同たれめのあつて面の似るものあり世間女見を思ふは
 翁のちち限るべうと公羽の産業令愛の年紀骨相集思合る悪棍の姓名住
 野狐祥と鏡示し更言の符合とるる令愛を遮るるこのうけ告るの推て
 宿を投しといひあつてあつて小躰に進め宮ふ野その理あり某の稻向氏名を
 判五と唱りての先祖相兼の田園百町とあつて狐のく里入綽號と百田の
 阿爺といふ一女あり男見は女見の友鶴と名ける今茲十八歳とありぬ頼



かた後不幸めこの年未彼未が乱妨ありて悔いくと地獄なりといふ最
 愛の女兒を棄て慚愧周章今さう決定する主意は告る所符合せぬ女
 児を返すといふと落涙を流して口説けるも秀はつくと他の握る春衣捺
 原來その魔平太奴の免いからん癖者其のまご今愛を救ひとてさういふ
 然とて宿願を投する小態をくちつひのいふあはれと善より與い悪に罰
 弱を瓜扶く強を折く是某が一癖に嚮く街衢の騷動風声今又さうい
 立上りてこの厄難を仰ぐうへん過さぬ忍びがくしとてあつて小對面と一
 臂の勞を披んとさういふさういふ如此とと辞を設けさういふと豪家の主人と膝
 衝きさういふ精細なやうと瓜ゆるは小厮一人貸り今よと劍岳と中入彼悪
 棍が宿願を赴き魔平太奴を懸殺し今愛をおく来る人躊躇のふとさういふ
 判五の呆れ果て瞬もせさういふ熟視するある能の死客入る早ゆを敵と

よりのぞかん身長六尺有高肥膏つた力あつととと彼魔平太の鼻雄鬚
 力入るもくのめいあをぞ加以そのひ小属をば悪棍を慮九餘人越の亦熊太
 三九二中太夷守水六臭水の沼太郎うど鳴るのひ方夫無當の力士あり
 撃劍卷法相撲のひいづもゆる所たれたる三面六臂のあはれとていづめい
 彼ホ一敵せん毛を吹く癖を求るが後悔其れふとさういふにさういふに
 頭を掉し入る秀秀八呵とさういふ笑ひ勝負へのさういふ少ふよさういふ公羽八仇の勇と
 知れともいふ其が勇をいふに嘗舊里を出ると親の讐敵六人を移
 弾せるとこの大刀敵百人のちうちあつてさういふ二十人のちうちあつと何のあそれ
 ひづる聊本度試とていひひひ左右をええとと床柱のりりる其名盤と
 かをさういふ引よせとく僅右の指をうけとく且く繁く燭臺の燈を扇く
 只下あつた小打滅りかき其名盤は臂をうけて推うとさういふ忽地四の脚折挫て

簀子の下におく滅込る。かゝる力士の世も亦あつた。と舌を巻く。あつたの
 翁ハ又さうお呆る。この半晌どうも。義秀其盤を擡遣り。こゝろへ勇とさうお
 足さむ。刃の截味えぬ。といひ。あむ。俱利伽羅の刀を抜て青銅の燭臺と燬と
 破さふ。草を刈よ。といふ。と易く燈ハ真直は落さ。その燭ハ更ハ滅ぶ。と判五ハ
 正。ありさま。おどろ。額を著き。君ハ正く天神ハ捷利疑ひ。ゆづ。と圖
 緯の形勢。小坂馬丸。あそむ。額を著き。君ハ正く天神ハ捷利疑ひ。ゆづ。と圖
 ら。と。おん。おん。借さ。こ。女。見ハ。い。あ。さ。さ。ん。この一郷の毒を除く。を。聖。衆。ハ。の
 飲。び。併。友。鶴。が。羊。来。信。ト。なる。地。藏。菩。薩。の。引。接。利。益。飲。俟。と。も。ぬ。る。と。客。ハ。の
 ち。づ。夜。飯。を。進。せ。入。浴。湯。の。加。減。も。よ。れ。比。る。の。途。の。疲。勞。を。休。へ。と。う。任。せ。よ
 赴。丸。多。と。い。ふ。義。秀。使。お。く。と。遅。と。さ。る。と。ま。さ。今。愛。と。機。さ。と。の。や。あ。ん。夜
 食。も。い。ま。ご。欲。う。と。酒。あ。ら。ぶ。出。一。碗。を。傾。さ。へ。と。一。碗。の。力。を。や。一。斗。を
 竭。せ。一。斗。の。勇。あり。か。る。時。あ。大。盃。と。も。よ。れ。と。く。と。い。そ。が。あ。つ。判。五。ハ

おもひ。勢。び。あ。つ。と。答。つ。遠。く。掌。持。と。老。僕。取。召。と。云。云。と。分。付。る。小。老。僕。ハ
 さ。ん。小。廝。ハ。次。の。房。小。竊。使。て。義。秀。が。勇。力。武。藝。を。憑。く。と。い。ひ。一。人。食。飲。ひ。て
 瞬間。酒。氣。温。め。肴。を。按。排。す。あ。つ。と。共。小。管。待。め。義。秀。ハ。些。も。辞。さ。大。盃。と
 引。受。く。三。度。喫。て。舌。も。ち。鳴。け。し。兵。糧。ハ。た。や。緯。足。さ。り。あ。つ。の。翁。ハ。い。ふ。は
 あり。小。廝。二。人。小。竹。興。を。昇。し。郷。導。を。させ。又。竹。興。ハ。令。愛。を。乗。せ。ん。ぬ。と。い。ふ。他
 の。の。い。ぬ。れ。も。要。は。し。と。判。五。ハ。判。五。ハ。魔。平。太。が。宿。野。よ。と。五。七。町。あ。り
 集。ま。り。其。既。又。令。愛。を。救。ひ。と。暗。号。を。せ。ん。猛。火。俄。頃。小。叢。る。狐。ハ。被。刃。み。走。上
 集。ま。り。か。ま。さ。り。利。さ。り。の。狐。擇。と。又。と。號。示。せ。ん。判。五。ハ。老。僕。と。高。量。根。成。莖
 平。よ。う。と。い。ふ。と。その。の。い。ぬ。れ。を。召。上。せ。ん。義。秀。は。狐。と。ち。ろ。く。招。き。と。不。盆。を。と。せ。ん。號
 示。と。初。の。匠。件。の。二。人。小。郷。導。さ。せ。て。劍。の。山。麓。へ。赴。く。暗。夜。ハ。や。亥。中。ぬ。る。ぬ。り。

朝夷巡嶋記全傳第二編卷之二

